

「今日はちよつとヤバいかもしれないから、なかはカンベンね」

そうして慎一郎の前にひざまずき、シャワーを拾いあげると、白く泡立った淫液にまみれた勃起を、丁寧^{ていねい}に洗った。

昨日の今日で危険日かそうでないか違つたりするものなのか。疑問に思ったが、おそらく昨日は初体験で夢中だったから、そこまで気をまわす余裕がなかったのだろう。ひやつとした冷たさに一瞬萎えかけたペニスも、たおやかな指の蠢きによつて硬く屹立した。はち切れそうな頭部は水を弾いてツヤツヤと輝き、少女の目は興味深げにその部分に注がれる。

「面白いね、オチン×ンって」

粘膜を指でチョンと突き、兄が思わず腰を震わせたのにクスツと笑みをこぼす。

珊瑚はシャワーの水をとめると、上向きのペニスを自らのほうに傾け、二三度しごいてからおもむろに丸い頭部をカプツと啜くわえた。

「あうッ」

期待はしていたものの、突然の口撃に慎一郎は情けなく呻いて膝を砕けさせた。

「ひもちひい?」

口にモノを入れたまま、お行儀悪く問いかける美少女。そんな愛らしさが、ますます

す背徳的な悦びを増大させる。

珊瑚は口をはずすと、はち切れそうな肉根をまじまじと見つめた。唾液に濡れたそれは生々しい色合いを増し、見慣れない者には内臓を想像させるだろう。

「ヌルヌルしたのが出てる」

鈴口に丸く溜まった雫を、珊瑚は不思議そうに眺めた。

「これがガマン汁?」

「正確にはカウパー腺液っていうけどね」

「……男の人も濡れるんだ」

そうして指先でヌメリを確かめ、掬い取ったそれを舐めた。

「ちよつとしょっぱい」

大胆というよりは無邪気な行為。慎一郎は思わずペニスを脈打たせ、新たな先走りをつろりと溢れさせた。

「なんか白っぽくなってるよ。イキそうなの?」

下腹にくっつきそうにいきり立つ硬直に指を絡め、珊瑚は上下にしごいた。頭部がふくらみ、胴体が骨のように硬くなる。

「そんなにしたら出ちゃうよ」

息を荒らげて告げると、

「ね、出るとこ見てもいい？」

しごく手を休めず、珊瑚が見あげてきた。

「こないだは見られなかったから、精液がどんなふうに出るのか見てみたいの」

「いいけど……こんな近くだとかかっちゃうぞ」

「そういうのもコーフンするんでしょ？ どうせハダカなんでもん。なかに出せなかつたお詫びに、いっぱいかけちゃって」

手筒の動きがリズムミカルになった。性感曲線が急上昇し、たちまちクライマックスが訪れる。

「出る——」

ビクツ、ビクツと腰が痙攣し、熱い滾りがペニスの中心を駆け抜けた。

「キヤツ」

白濁がほとばしった瞬間、珊瑚は小さな悲鳴をあげた。しかし、糸を引いて放たれた粘液が自らに降りかかるのも厭わず、射精の様子をその目にしっかりとらえた。

「すごい……」

「つづけて——もっとほしいて」

「あ、うん」

つづいて第二波、三波が容赦なく襲いかかり、滑らかな肌を汚していく。肉根は瀕死の獣みたいに痙攣し、残りをすべてドクドクと溢れださせた。

噴出がやんでも、珊瑚は動きをとめなかった。指に絡みついた粘つきを利用してヌルヌルと擦りつづける。おかげで、慎一郎は最後の一滴まで気持ちよく射精することができた。

白濁は少女の顔に淫らな模様を描いていた。最初の一撃は鼻のすぐ横を直撃し、それは唇の端を横切つて顎にまで垂れた。瞼のあたりや唇にも飛んでおり、まさに穢されたという風貌。指から手首にも筋が伝い、胸や腿にも滴っている。痛々しさを覚える反面、このうえなくエロチックな眺めでもあった。

「もういいよ」

声をかけられ、珊瑚は萎えかけた器官からようやく指をはずした。

「いっぱい出たね、お兄ちゃん。気持ちよかった？」

「ああ、すごくよかった」

言われて、精液まみれの少女は嬉しそうに白い歯を見せた。

「エッチするのとどっちが気持ちいい？」

